ご挨拶 Greeting

「中長期ヴィジョン」と宇宙の残響

「大学が倒れても」，と思わず書いてしまった。もちろん，附属図書館が大学から離脱したいと思っているわけではない。しかし，もし大学以外の組織が新たにスポンサーとなってくれるなら，学術情報の受発信基地として世界とつながり，アカデミックな空間として地域のニーズに応えて，大学から離れても図書館は軽く千年ほどは生き延びるのではないか。だから続けて，「ミレニアム図書館」と書いてしまった。これは，わが附属図書館の「中長期ヴィジョン」案の冒頭の言葉であった。いまは削られて姿を消した。そして，その言葉の響きだけが，図書館の中で反響を繰り返している。聞きとめる人を求めて･･･

大学の歴史は，古くは紀元前7世紀のイスラマバード近郊のタキシラ僧院にまで遡る。現在のいわゆる大学（university）の原型となったボローニャ，オックスフォード，パリの各大学がそれぞれ創設されたのは，ほぼ11世紀から12世紀。では，図書館は，常にそうした大学の「附属」という「名」しか持たなかったのだろうか？　そうではない。紀元前7世紀のアッシリア王の宮廷図書館（アッシュールバニパル図書館）を別にしても，古代世界に名を馳せた図書館はすでに己自身の名を立派に持っていたのだ。紀元前3世紀のアレキサンドリア図書館（エジプト）を始め，いずれもトルコの地に造られたペルガモン，ケルススといった図書館，世に言う「古代の三大図書館」がそうである。

つまり図書館は，それ自身だけで存在するだけの機能と普遍的価値をもつ。世の偶然が重なっていたら，大学こそが「図書館附属大学」であったとしても不思議はないであろう。むしろ，そのような視点の高みが，現在の大学図書館には必要である。自分の大学に奉仕するだけに留まらない，千年先を見通した＜図書館の幻視＞をもつべきだ，と思う。

しかし，われわれがいま直面する問題は，容易にわれわれを遠い未来へと放してはくれない。今回，策定した附属図書館の中長期ヴィジョンは，資料収蔵館としての図書館から学習支援空間としての図書館に軸足を移すため，電子化の推進に舵を切った。公共図書館だろうと大学図書館だろうと，どの図書館でも頭痛の種となっている書庫の狭隘化を解決し，新たなタイプの学習・交流・創造の空間を造り出すためには，紙媒体の貴重な資料を保持しつつも，これからの基本資料の電子化を大胆に進めなければならない。スペースの無際限の拡大が望めない以上，スペースの機能転換が必要なのだ。

といっても，電子ブックなどの電子資料の拡大がそう易々と実現するはずもない。だから一面では，安心してもらってもいい。当面は，利用者や出版社の動向などを睨みながら，均衡の取れた電子化の道を歩むことになるだろう。この意味で，「電子化図書館」は，踏まねばならない＜茨＞ではなく，未来を拓く＜扉＞として選択されたのだ。

ブエノスアイレス生まれの作家，ホルヘ・ボルヘスは短編「バベルの図書館」をこう書き始めた。「（他の者たちは図書館と呼んでいるが）宇宙は」，と（『伝奇集』岩波文庫，p. 103）。まことに図書館とは宇宙である。しかし，その宇宙が今後どのようなものになっていくのかは，ボルヘスの後に言葉を続けるわれわれの恐れなきイマジネーションにかかっている。

附属図書館長　　柴　田　正　良